

日本語唱法の研究

—鼻濁音 II—

河合 玲子

A Study of the Japanese Singing Method

—about Nasal Consonants II—

Reiko KAWAI

1 緒言

本学短期大学部保育学科では、保育者に必要不可欠な音楽の基礎知識と技術の習得のために、1年生の前期に保育士資格に必修である「保育表現技術（音楽1）」（以下「音楽1」）の授業でバイエル教則本を中心としたピアノ技術の習得を行い、後期には幼稚園教諭免許資格必修となる「歌に関する技術」を学ぶために「保育表現技術（音楽2）」（以下「音楽2」）にて「弾き歌い」の個人指導と「声楽」のグループ指導による授業を行っている。

「音楽1」では、平成24年度よりピアノの個人指導と少人数のグループによる「楽典」の学習指導という形で行っているが、「音楽2」では、1クラスを2つのグループに分け、45分交代で「弾き歌い」の個人指導の授業と、「声楽」のクラス授業を行っている。「弾き歌い」の授業では、「音楽1」で培ったピアノ技術と音楽的基礎を基に、子どもの歌の伴奏の技術の向上と、弾きながら歌う技術について個人指導を行い、「声楽」のクラス授業では、子どもの歌の歌唱法を発声や発音、詩の意味、背景なども考慮した基礎的な学習をグループ指導で行っている。

それまで1年生だけで終了していた音楽技術の授業に、平成25年度からは選択科目として2年前期に「保育表現技術（音楽3）」（以下「音楽3」）の授業が加わり、保育者としてより高度な音楽技術の習得を目標とした授業を行っている。この「音楽3」は、「音楽1」、「音楽2」で習得した技術を発展させたものであり、「音楽2」同様1クラスを2つのグループに分け、45分交代で「ピアノ」と「弾き歌い」の個人指導と、子どもの歌を基本とした「初見演奏」と「伴奏づけ」のグループ指導を行っている。選択科目ではあるが2年生の殆どの学生が履修し、教育実習、保育実習、就職試験対応などに学びを繋げている。

保育の現場では、保育者が歌うのを模倣して子どもたちは歌を覚えていく。子どもたちは、言葉の意味を知らなくともメロディーや言葉の雰囲気からその意味を感じ取り、語彙を増やしていく。また高さの異なる音程を含め歌うことで呼吸器官の身体能力を向上させる。このように子どものうたは子どもの成長に必須のものといえる。歌を指導する保育者には、子どもたちの手本となる歌唱技術を身に付ける必要があるといえる。筆者は、「美しい日本語」で歌唱するための技術の一つである「鼻濁音」について注目し、名古屋女子大学紀要第61号（人文・社会編）『日本語唱法の研究 - 鼻濁音 I - 』（以下『鼻濁音 I』）p297~310にて学生の鼻濁音に対する認知の調査、検証、結果を報告したので参照されたい。

本研究では、美しい日本語で歌唱するための技術である「鼻濁音」を学生がどのように捉えているか、更に調査、検証し、述べることにする。

2 背景

「鼻濁音」とはガ行における鼻音化した発音法である。筆者は、幸いにも小学校¹⁾ 1年生の国語の時間で恩師水野志き先生より鼻濁音の教えを受けた。「サクラ ガ サイタ」を音読する時には<サクラ>という言葉で桜の花をはっきりと意識し、<ガ>の発音は特に丁寧に鼻に掛けて<カ²⁾>と柔らかく発音するように、それに続く<サイタ>という言葉は元気よくはっきりと発音するように指導を受け、何度も音読をさせられたことを今でも鮮明に覚えている。水野氏がかなりの年配の教員であったことにも関連しているのかもしれないが、国語教育にお力を注がれ、特に幼い時期に日本語の音について鋭い感覚を身に着けることの必要性を感じておられたように思う。入学して間もない頃であったが、幼いながらも筆者の鼻濁音に対する音と感覚がその時に植え付けられた。そして、その時に初めて「鼻濁音」という言葉を知った。

現在のみならず、当時もこの「鼻濁音」について教育指導要領に記載されているわけではない。「鼻濁音」はその使用に至って地域差もある³⁾が、以前、テレビやラジオといった公共の電波から流れてくるアナウンサーの発音は、共通語として「鼻濁音」が当然のように使われていた。また流行歌を歌う歌手たちの歌声やインタビューの会話からも、日本語の言語として「鼻濁音」は発音されていた。これら公共の電波に音声に乗る人たちとは、ある種の訓練を受けた限られた人たちであった。人々は共通語という名の下、「鼻濁音」を自然な日本語の使い方として受け入れていたのである。しかし、テレビメディアの発達と共に、ラジオ放送など音声へ注がれていた感覚は、いつしかテレビ放送などの視覚的感覚へ意識が移行していった。ラジオからテレビへの一般大衆の興味は、聴覚における刺激の感覚から、視覚的感覚への移行であったように筆者は考える。何故なら、テレビなどの公共の電波からは訓練を受けたプロフェッショナルと呼ばれる人たちではなく、一般人が頻繁に出演するようになった。訓練を受けていない者の露出頻度は更に増し、それに伴い人々の感覚は、聴覚的感覚より視覚的刺激的強いものへと移行したと考えられる。

このように「美しい日本語」について訓練を受けていない人たちの登場により、「美しい日本語」に対する意識から、意識をしない「日本語」の発音へと全国的に流布したといえよう。近頃ではテレビ放送のアナウンサーですら「鼻濁音」を使用しない人が現れ、Jポップにみられる歌謡曲の歌唱からも「鼻濁音」が聞かれることはほとんど無い。若者のみならず近年の風潮として「鼻濁音」を使用しないで発音することが多い。彼らは使用しないのではなく、知らないために使用できないのではないかと筆者は考える。

「鼻濁音」は美しい日本語である。保育者は子どもたちに美しい日本語で語り掛け、美しい日本語で歌唱することが望ましく、保育者となる学生たちは、「美しい日本語」で歌唱するための技術習得が必要である。しかし学生たちの歌唱は高い声の出し方などに注意が向いており、自分たちが発している日本語については殆ど意識されていないように思う。何故なら子どものうたの歌詞は平易な言葉が使われ、意識しなくても自由に発音できるからである。歌うためには発声法が必要であるが、「美しい日本語」を意識して歌唱することにより、発声法にも相乗効果をもたらすのである。

本研究は、「美しい日本語」で歌唱するための方法である「鼻濁音」について学生の状況を調査し、今後の学生指導に反映させていくことを目的とする。

3 アンケート調査と結果

筆者の「音楽2」授業受講者40名を対象に、「鼻濁音」についての認知度を調べるために、授業開始時にアンケート調査（以下「アンケート1」）を行った。そして授業終了時に授業の成果を調べるためにアンケート調査（以下「アンケート2」）を行った。また、調査の対象者を「音楽3」でも引き続き指導したことより、授業終了時に「鼻濁音」に対する意識の調査（以下「アンケート3」）を実施した。それぞれの結果を1)、2)、3)として報告する。

1) アンケート1

調査時期：平成26年9月30日（火）「音楽2」授業内

調査対象：授業履修者40人（学生ア～リ）

鼻濁音についての概念と使用について調査するために「音楽2」授業開始の第1回目に履修者40人に対し「アンケート1」を行った。この授業開始時アンケートは平成25年度『鼻濁音I』の授業開始時⁴⁾にも行っているが、今回は、設問Iを①知っている、②知らないの2回答に、設問IIを①できる、②できないの2回答に簡素化した。設問III⁵⁾の問1～問10は今回でも同じ内容とした。前回の設問IVは、全国的に見れば地域差があるとしても、本学に在籍する学生の殆どが中京圏からの出身ということで地域の比較は不向きという理由から今回は削除し、設問Vは3世代住居とそうでない場合との差があまりなかったという結果から今回の調査からは外した。その代わりに「鼻濁音」を知っていると答えた学生を対象に、どこで知ったのかを設問IIのbとして調査に加えた。そのアンケート1の内容は図1である。

アンケート1の結果、設問Iでは、鼻濁音という言葉に対して①知っていると答えた学生は8人（20%）、②知らないと答えた学生は32人（80%）であった。

設問IIのaは、設問Iで①できると答えた8人に対する設問である。その中で①できると回答した学生は1人（学生ト、①知っていると回答した8人の中で12.5%、全体40人では2.5%）であり、名前は知っていてもできない学生が7人（学生ケ・シ・ネ・ミ・モ・ヤ・ラ）、つまり対象学生40人中39人（97.5%）の学生が知らないと答えた。設問IIのbの回答結果は設問Iで①知っていると回答した8人に対して調査したものであり、その結果は、小学校、中学校、高等学校の音楽の時間や合唱指導の際に習ったという学生が5人（学生ケ・シ・ミ・ヤ・ラ）、中学校の国語の時間に習ったという学生が1人（学生モ）、児童劇団で習ったという学生が1人（学生ト）、中学校時代に友人に聞いたという学生が1人（学生ネ）であった。

設問IIIの問1～問10は、学生たちが「鼻濁音」というその言葉の印象から各自が感覚的にそれを理解し、その使用をどのように判断するのかを調査した結果である。設問Iで①と答え設問IIで①と答えた学生をA、設問Iで①と答え設問IIで②と答えた学生をB、設問Iで②と答えた学生をCとしてその結果を表1-1にまとめた。また比較を明らかにするため、正解解答数を表1-2、その相対数を表1-3にまとめた。

「保育表現技術 (音楽2)」日本語についてのアンケート1

実施日 平成26年9月30日

I～IIについて自分に当てはまる質問に○印をつけて下さい。

I. 鼻濁音という言葉について… ① () 知っている。 ② () 知らない。

II. Iで①知っている答えた人にお尋ねします。

a. その使い方について… ① () できる。 ② () できない。

b. それはどこで知りましたか? 具体的に記入してください。

[]

III. 次の下線部の言葉について、鼻濁音で発音すると思うものを○で囲んでください。

1. がっこう 6. とうげ
 2. ちゆうがっこう 7. ゆうぐれ
 3. とびらがひらく 8. がラス
 4. がタがタするつくえ 9. おげんきですか
 5. じゆうごさい 10. もりのきぎ

図1 アンケート

表1-1 アンケート1 設問Ⅲにおいて鼻濁音を使用すると解答した学生の結果

単位(人)

| 項目 | 人数 | 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 正解数 | 不正解数 |
|------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|------|
| A 設問Ⅰで①と答え、設問Ⅱで①と答えた学生 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 7 | 3 |
| B 設問Ⅰで①と答え、設問Ⅱで②と答えた学生 | 7 | 3 | 1 | 4 | 1 | 1 | 3 | 0 | 1 | 1 | 2 | 38 | 32 |
| C 設問Ⅰで②と答えた学生 | 32 | 8 | 15 | 8 | 6 | 13 | 10 | 12 | 5 | 10 | 8 | 171 | 149 |
| 合計 | 40 | 11 | 17 | 12 | 8 | 14 | 14 | 12 | 6 | 11 | 11 | 216 | 184 |

表1-2 アンケート1 設問Ⅲにおいて鼻濁音使用の正解解答の結果

単位(問)

| 項目 | 人数 | 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 平均正解数 | 平均不正解数 |
|------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-------|--------|
| A 設問Ⅰで①と答え、設問Ⅱで①と答えた学生 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 1 | 1 | 1 | 7 | 3 |
| B 設問Ⅰで①と答え、設問Ⅱで②と答えた学生 | 7 | 4 | 1 | 4 | 6 | 6 | 3 | 0 | 6 | 6 | 2 | 5.4 | 4.6 |
| C 設問Ⅰで②と答えた学生 | 32 | 24 | 15 | 8 | 26 | 19 | 10 | 12 | 27 | 22 | 8 | 5.3 | 4.7 |
| 合計 | 40 | 29 | 17 | 12 | 32 | 26 | 14 | 12 | 34 | 29 | 11 | 5.9 | 4.1 |

表1-3 アンケート1 設問Ⅲにおいて鼻濁音使用の正解解答率

単位(%)

| 項目 | 人数 | 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 正解率 | 不正解率 |
|------------------------|----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| A 設問Ⅰで①と答え、設問Ⅱで①と答えた学生 | 1 | 100 | 100 | 0 | 0 | 100 | 100 | 0 | 100 | 100 | 100 | 70 | 30 |
| B 設問Ⅰで①と答え、設問Ⅱで②と答えた学生 | 7 | 57.1 | 14.3 | 57.1 | 85.7 | 85.7 | 42.9 | 0 | 85.7 | 85.7 | 28.6 | 54.3 | 45.7 |
| C 設問Ⅰで②と答えた学生 | 32 | 75.0 | 46.9 | 25.0 | 81.3 | 59.4 | 31.3 | 37.5 | 84.4 | 68.8 | 25.0 | 53.5 | 46.5 |
| 合計 | 40 | 77.4 | 53.7 | 27.4 | 55.7 | 81.7 | 58.1 | 12.5 | 90.0 | 84.8 | 51.2 | 59.3 | 40.7 |

2) アンケート2

調査時期：平成27年1月20日 (火) 「音楽2」授業内

調査対象：授業履修者40人 (学生ア～リ)

学習成果を確認するため、授業終了時に「アンケート2」を授業出席者40人に対し実施した。

平成25年度『鼻濁音 I』のアンケート 2⁶⁾で実施したものに修正を加えたものである。設問 I は、今回もそのまま使用した。また、本論のアンケート 1 の設問 III で使用した問 1～問 10 と同じ内容である。『鼻濁音 I』の設問 II は、「鼻濁音」の語彙の認識に関する設問であったため、今回のアンケート 2 では削除した。設問 III は、3 回答の内容を「鼻濁音」の習熟度の状況について①前からできる、②できるようになった、③できないとして設問 II へ移動した。また設問 IV の内容を、今回のアンケート 2 では設問 III へ移動し、そのまま使用した。学生が、美しい日本語で歌唱するための発音法として「鼻濁音」を学んだことにより、「鼻濁音」と複合的に気を付けていることがあるのか、あるとすればそれは何かを調査するため、記述式による設問 IV を加えた。またアンケート 1 の調査より「鼻濁音」について殆ど知らないという結果を踏まえ、「音楽 2」の第 2 回授業時に鼻濁音の使い方についてのプリント⁷⁾を学生に配布し、授業内での指導の他、各自が学習できるようにした。アンケート 2 の内容は図 2 である。

「保育表現技術（音楽 2）」日本語についてのアンケート 2

実施日 平成 27 年 1 月 20 日

I. 次の下線部の言葉について、鼻濁音で発音すると思うものを○で囲んでください。

| | |
|-------------------------------|---------------------|
| 1. が <u>っ</u> こう | 6. とう <u>げ</u> |
| 2. ちゅうが <u>っ</u> こう | 7. ゆう <u>ぐ</u> れ |
| 3. とびらが <u>ひ</u> らく | 8. <u>ガ</u> ラス |
| 4. <u>ガ</u> タ <u>ガ</u> タするつくえ | 9. お <u>げ</u> んきですか |
| 5. じゅう <u>ご</u> さい | 10. もりの <u>き</u> ぎ |

II. 鼻濁音の使い方について自分に当てはまる質問に○印をつけて下さい。

① () 前からできる。 ② () できるようになった。 ③ () できない。

III. あなたが鼻濁音を使う場合、どのような時に気を付けていますか？（複数回答可）

① () 普通の会話から気を付けている。

② () 人前で話をする時に気を付けている。

③ () 朗読をする時に気を付けている。

④ () 歌唱をする時に気を付けている。

IV. 歌唱の際、発音で鼻濁音以外に気を付けていることがあれば、具体的に記入してください。

[]

図2 アンケート2

アンケート 2 の結果、設問 II は授業を受けたことによる「鼻濁音」の習熟度の結果である。①前からできると答えた学生は 1 人 (2.5%) であった。②できるようになったと答えた学生は 23 人 (57.5%)、③できないと答えた学生は 16 人 (40%) であった。アンケート 1 の設問 III でも同じ問題を設置したが、授業を受けたことによりその結果に変化があったのかを明らかにす

るために、設問Ⅱで①と答えた学生をD、②をE、③と答えた学生をFとして設問Ⅰの解答結果を表2-1にまとめた。またその正解解答数の結果を表2-2、正解解答率の結果を表2-3にまとめた。

表2-1 アンケート2 設問Ⅰにおいて鼻濁音を使用すると解答した学生の結果

単位(人)

| 項目 | 人数 | 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 正解数 | 不正解数 |
|---------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|------|
| D 設問Ⅱで①と答えた学生 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 8 | 2 |
| E 設問Ⅱで②と答えた学生 | 23 | 9 | 16 | 22 | 3 | 3 | 14 | 5 | 8 | 5 | 6 | 150 | 80 |
| F 設問Ⅱで③と答えた学生 | 16 | 12 | 7 | 16 | 3 | 1 | 6 | 5 | 8 | 2 | 3 | 91 | 69 |
| 合計 | 40 | 21 | 24 | 39 | 6 | 4 | 21 | 10 | 17 | 7 | 10 | 249 | 151 |

表2-2 アンケート1 設問Ⅰにおいて鼻濁音使用の正解解答の結果

単位(問)

| 項目 | 人数 | 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 平均正解数 | 平均不正解数 |
|---------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-------|--------|
| D 設問Ⅱで①と答えた学生 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 1 | 8 | 2 |
| E 設問Ⅱで②と答えた学生 | 23 | 14 | 16 | 22 | 20 | 20 | 14 | 5 | 15 | 18 | 6 | 6.5 | 3.5 |
| F 設問Ⅱで③と答えた学生 | 16 | 4 | 7 | 16 | 13 | 15 | 6 | 5 | 8 | 14 | 3 | 5.7 | 4.3 |
| 合計 | 40 | 19 | 24 | 39 | 34 | 36 | 21 | 10 | 23 | 33 | 10 | 6.2 | 3.8 |

表2-3 アンケート1 設問Ⅰにおいて鼻濁音使用の正解解答率

単位(%)

| 項目 | 人数 | 問1 | 問2 | 問3 | 問4 | 問5 | 問6 | 問7 | 問8 | 問9 | 問10 | 平均正解率 | 平均不正解率 |
|---------------|----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|--------|
| D 設問Ⅱで①と答えた学生 | 1 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 0 | 0 | 100 | 100 | 80 | 20 |
| E 設問Ⅱで②と答えた学生 | 23 | 60.9 | 69.6 | 95.7 | 87.0 | 87.0 | 60.9 | 21.7 | 65.2 | 78.8 | 26.1 | 65.3 | 34.7 |
| F 設問Ⅱで③と答えた学生 | 16 | 25.0 | 43.4 | 100 | 81.3 | 93.8 | 31.3 | 37.5 | 50.0 | 87.5 | 18.8 | 56.9 | 43.1 |
| 合計 | 40 | 62.0 | 71.0 | 98.6 | 89.4 | 93.6 | 64.1 | 19.7 | 38.4 | 88.8 | 48.3 | 67.4 | 32.6 |

設問Ⅲは鼻濁音の使用する場面についての調査であるが、その結果は①普段の会話から気を付けていると答えた学生が0人(0%)、②人前で話をする時に気を付けると答えた学生が0人(0%)、③朗読をする時に気を付けていると答えた学生が10人(25%)、④歌唱する時に気を付けていると答えた学生は40人(100%)であった。設問Ⅳは、歌唱の際に鼻濁音以外の発音で気を付けていることについての調査である。記述をした学生は17人(42.5%)であった。内訳はDの回答者が1人(学生ト)、Eの回答者が11人(学生ア、エ、カ、キ、ケ、コ、タ、チ、ツ、ノ、ヒ)、Fの回答者が5人(学生テ、ヌ、フ、モ、ヤ)であった。その内容は、言葉をはっきりと発音する(学生キ、ケ、コ、タ、ノ、モ)。最初の言葉をはっきり言うようにする(学生カ、ツ、モ)。子音をはっきりと発音する(学生ト)。ヤ行、ダ行の発音(学生エ、テ、ヤ)。助詞の「～は」「～を」(学生テ)。「ん」の発音(学生ヒ)。言葉によって強く発音しすぎないように気を付ける(学生ヌ)。口を大きく開ける(学生キ、モ)。口を縦にあける(学生ト)。お腹から声を出す(学生キ、チ、ト)。強弱に気を付けて声を出す(学生ア)。大きい声を出す(学生フ)。以上であった。

3) アンケート3

調査時期：平成27年7月27日(木)「音楽3」授業内

調査対象：授業出席者38人(学生ア～コ、シ～ソ、チ～リ)

本学保育学科では、1年生後期授業終了後の春休みに保育実習1Aの実習を行う。また2年前期の期間に幼稚園教諭免許を取得するための教育実習を4週間行う。筆者が「音楽2」のグループ授業で担当した40名は、「音楽3」でも全員履修し、筆者が引き続きグループ授業を担当したことから歌唱について引き続き指導を行った。保育実習1Aや教育実習を経験して、

学生たちは子どものうたを歌う際にはその対象者がいるということを実感したに違いない。歌唱するということは表現することであり、学生たちが鼻濁音についてどのように捉えているのかを調査するために、子どものうたの歌唱で鼻濁音を使用した場合と使用しなかった場合を筆者が実際に歌唱して学生たちに聴かせ、どのような表現法と捉えているのかを調査した。時期は、平成27年7月27日の授業終了時に当日欠席をした2名（サ、タ）を除く38名に対し記述式による鼻濁音についての感想のアンケート（以下「アンケート3」）を実施した。その内容は図3である。

「保育表現技術（音楽3）」日本語についてのアンケート3

実施日 平成27年7月27日

次の子どもの歌の下線部の発音を「鼻濁音」を使用して歌唱した演奏と、使用しないで歌唱した演奏の印象についてⅠからⅢの質問に答えてください。

《お花が わらった》（保富康午 作詞／湯山 昭 作曲）

おはなが わらった おはなが わらった おはなが わらった おはなが わらった

みんな わらった いちどに わらった

おはなが わらった おはなが わらった おはなが わらった おはなが わらった

みんな わらった げんきに わらった

Ⅰ. 子どもの歌の歌唱演奏を聴いた時、「鼻濁音」を使った演奏と使わなかった演奏の違いを述べてください。

[]

Ⅱ. 子どもの歌を自分自身が歌唱演奏した時、「鼻濁音」を使った演奏と使わなかった演奏の違いを述べてください。

[]

Ⅲ. 子どもの歌を歌唱する時に、あなたが「鼻濁音」以外で気を付けていることがあれば記述してください。

[]

図3 アンケート3

調査方法は、『お花が わらった』（保富康午作詞、湯山昭作曲）⁸⁾を題材に、設問Ⅰでは、筆者が歌唱演奏し学生に聴かせた。具体的には、歌唱の1回目は下線部の言葉を「鼻濁音」にして歌唱し、2回目は鼻濁音を使用しないで歌唱し、その感想を記述させた。

設問Ⅱは、学生たちに下線部を1回目の歌唱の際は、「鼻濁音」にして歌うように指示し、2回目は下線部を「鼻濁音」にならないように指示して歌唱させ、その感想を記述させた。設問Ⅲは学生たちが子どものうたを歌唱する際に、「鼻濁音」以外でどのようなことに注意を払い歌唱しているのかを調査したものである。

設問Ⅰに対する学生38人の回答の内容は次の通りであった。使った時の方が表現豊かに感じた、使わないと曲の表情がないように感じた（学生ア、イ、テ、ム）。使わないと淡々として聴こえる（学生セ、ソ、テ、ミ）。鼻濁音を使った方が優しく聴こえた、曲の物語が浮かんだ（学生ニ、ヘ）。きれいに聞こえるし、使った時の方が情景を浮かべられる（学生ウ）。使った

方が、感情が入って聴こえる(学生エ)。鼻濁音を使わないと平坦な感じに聴こえる(学生カ)。鼻濁音を使った方が、歌詞が聞き取りやすい(学生シ、ス、ト)。鼻濁音を使った方が「が」が自然に聞こえる(学生チ、ユ)。使った方が「が」文章らしく聞こえる(学生オ)。使った時の方が、言葉と言葉の間に区切りが入ったようにきこえた(学生マ)。鼻濁音を使ったほうが、言葉が滑らかに聞こえる(学生フ)。鼻濁音を使わないと言葉だけが流れていく感じがした(学生ネ)。違いがよくわからないが、使った時の方が聴きやすい(学生ホ)。使った時の方が言葉と言葉の間に区切りが入ったようにきこえた(学生マ)。使った方がきれいな音に聴こえる。(学生コ、ラ)。使わないと「が」が汚い(学生コ、ヌ)。鼻濁音を使わないと「が」が尖って聴こえる。(学生キ、チ)。鼻濁音を使わないと「が」が強調されて歌がきつい感じがした(ナ、ヌ、ノ、ヒ、ユ)。鼻濁音を使った方が、柔らかく聴こえる(学生カ、ケ、コ、チ、ト、ノ、ヒ)。使った方が滑らかに聴こえる(学生セ、ナ、ノ、ヤ、ラ、ヨ)。鼻濁音を使った方が優しく感じた(学生ハ、ミ、ユ)。鼻濁音を使った方が歌に重みを感じる。(学生ク)。上手に聴こえる(学生オ)。違いがよくわからない(学生メ、モ)。

設問Ⅱの学生38人の回答の内容は次の通りであった。歌詞の雰囲気や伝えやすい(学生ア)。鼻濁音を使わない方が歌い易いが、曲が単調になる(学生イ)。鼻濁音を使うのは面倒くさいが、歌っていて気持ちがよい。(学生ウ)。使わないと『が』を強く歌ってしまう、あまりきれいではない(学生エ、コ、セ、ト、ヒ、)。言葉のメリハリを付けて歌うことができる(学生オ)。子どもたちに使って歌うとよく聴いてくれる(学生カ)。鼻濁音を使うと優しい気持ちで歌える(学生キ)。鼻濁音を使って歌うと息が長く続けて歌える(学生ク)。「お花」と「わらった」という言葉が伝わりやすいと思った(学生ケ)。使った方が歌いやすい(学生シ、ス、チ、ツ、ト、ラ)。使った方がよいと思うが面倒くさい(学生ス、ニ)。使いたいが、使って歌うと鼻に掛かった感じで歌いにくい(学生ソ、ネ、ノ)。鼻濁音は歌う時少し詰まった感じがする(ヌ)。自分で歌ってみても滑らかな感じがする(学生ネ、ノ)。鼻濁音の後の言葉に繋げやすく歌える(学生フ、ヘ)。鼻濁音を使うと言葉に意識が向く(学生マ)。使い慣れていなかった時は歌いにくかったが、慣れてくると逆に歌いやすい。特にスラーのある曲が歌いやすい(学生ミ)。使うと丁寧な歌える(学生モ)。使って歌うと自然に体が揺れる(学生ム)。使うのに意識過ぎてしまい変な感じになる(学生ヨ)。使うのが難しい(学生ハ、ホ、メ、ユ、ヨ)。

設問Ⅲの学生38人全員の回答の内容は次のとおりであった。曲の強弱をつけて歌うこと(学生ア、カ)。言葉を明瞭に発音して歌うこと(学生イ、エ、オ、ス、ニ、ネ、ノ、フ、ホ、メ、モ、リ)。きれいな声で歌い、音程を正しく歌うこと(学生ウ、ナ、ヒ、ユ)。歌の言葉を丁寧に歌う(学生オ、カ、キ)。音を伸ばす時にお腹で歌う(学生カ)。口の開け方に気を付けて歌う(学生キ)。曲の雰囲気を大切に歌う(学生ク、ヒ、マ)。歌詞のイメージを声色に乗せる(学生ケ)。笑顔で明るく大きな声で歌うことを心掛けている(学生コ)。歌詞を一度読んでイメージしてから歌う(学生シ)。イメージを想像して歌う(学生ス、ネ、ヨ)。表情豊かに歌う(学生セ、ヘ)。大きな声で歌う(学生ソ、ハ、ヤ)。発声に気を付けて歌う(学生チ)。歌いだしの最初の言葉の音をしっかりと歌う(学生ツ、テ)。ハ行・サ行など聞こえづらい発音に気を付ける(学生テ)。子音をきちんと発音する(学生ト)。声がだらけないように気を付ける(学生ト)。言葉からイメージを膨らませる(学生ト)。笑顔で歌う(学生ナ、ニ、ヤ、ユ)。優しく歌う(学生ヌ)。発音が汚くならないように気を付ける(学生ミ)。元気よく歌う(学生ム)。曲のイメージに合った歌い方をする(学生ヨ)。子どもが言葉をわかるようにはっきり歌うことで楽しめるように元気よく歌う(学生ラ)。

4 考察

アンケート1は「鼻濁音」に対する認識の調査であった。設問Ⅰの鼻濁音という言葉に対して①知っていると答えた学生は8人(20%)、②知らないと答えた学生は32人(80%)であり、この数値は、平成25年度入学の保育学科の全学生の昨年度の調査結果⁴⁾の①知っているの調査対象者167人中35人(全体の21%)と回答数値とほぼ一致しており、学生の「鼻濁音」に対する認知度の相対数が2割と明らかになった。設問Ⅱのaは、「鼻濁音」の使用についてできるかの調査であったが、①できると回答した学生はたった1人(調査対象者40人の2.5%)であり、これも昨年度のできると回答した調査対象者167人中4人(2.4%)との結果とほぼ一致であった。つまり学生の殆どが「鼻濁音」を使用することができないことが明らかとなった。設問Ⅱのbの回答した8人は、その内の7人が小学校、中学校、高等学校でその存在を知ったと回答しているが、特に合唱等の『音楽』の授業の際に指導を受けたという学生が5人と多かった。これも一部の「鼻濁音」の存続に危機感を持った教師による指導ではないかと筆者は考える。また「鼻濁音」の存在を周知させるのは『国語』の教師よりむしろ『音楽』の教師たちが担っていたということも明らかになった。ここで述べた7人の学生はその使用をできないと答えており、歌唱をした際に一過的な学習であったと考えられる。唯一できると回答した学生トは高校まで児童劇団に所属しており、その継続した指導の中で身に付けていったことが学生との話から明らかになった。学生トからいえることは、その使用方法について細かく指導を受ける必要があるといえる。「音楽2」の授業で指導する意義を確認することができた。

設問Ⅲは、学生たちが実際に「鼻濁音」というその言葉の印象から各自が感覚的にそれを理解し、その使用をどのように判断するのかを調査した結果であるが、調査を行った時、学生たちは各々発音を試しながら回答をしていた。設問Ⅰで①と答え設問Ⅱで①と答えた学生トは正解率が70%と高いレベルであったが全問正解ではなかった。その使用方法をマスターしているとは言い難いことがわかり指導の必要がわかった。設問Ⅰで①と答え設問Ⅱで②と答えた学生のBと設問Ⅰで②と答えた学生Cとは、その差が殆どなかったと言えよう。Bの方がほんの少し正解率が高いが、その使用方法については、Cの感覚的な解答とほぼ同じであり、問1、問2、問7ではCの方が、正解率が高くなっている。小学校、中学校、高校などで「鼻濁音」について習熟した経験はあると考えるが、その使用を継続しなかったBはC同様のレベルに落ちたといえよう。

アンケート2は「音楽2」の授業を受けて「鼻濁音」についての習熟度の結果である。授業を受けてできるようになったと答えた学生は23人(57.5%)、③できないと答えた学生は16人(40%)であった。もともとできたと回答した学生1人を入れると、その習熟度は6割となる。この数値が高いとは言い難い。4割の学生がその使用方法についてできないと回答しているのである。授業を経て「鼻濁音」という言葉は全員知ったが、今後は「鼻濁音」を身に付けさせるための指導法も研究していく必要があるといえる。

「鼻濁音」の使用方法については、表2-1、表2-2、表2-3からも読み取れるように、全員正解率が上がった。特に問3の助詞<が>についてはその正解率が98.6%と殆どの学生が「鼻濁音」を使用すべきであると理解していた。特にCの学生たちが100%正解であったことは特筆すべき結果であった。また、<ガタガタ>といったオノマトペ⁹⁾では89.4%、数字の<じゅうごさい>では93.6%、問9の接頭語<お>の付いた言葉には88.8%の高い正解率で「鼻

濁音」を使用しないということも理解していることが明らかになった。その逆に、問2、問6、問7、問10といった語頭でないガ行の鼻音化については不正解の解答が多かった。中でもくゆうぐれ>という言葉に関しては、正解率が19.7%とかなり低い結果であった。これは、くゆうぐれ>の発音でくゆう>と唇の緊張をした状態で鼻音化した<ぐ>を発音しようとするとき口腔内の緊張を更に高めなくてはならず、鼻音化せずに発音した方が容易であるからと推察できる。「鼻濁音」の中でも高度なテクニックが必要といえる。

鼻濁音の使用する場面については、朗読をする時に気を付けていると答えた学生が10人(25%)、歌唱する時に気を付けていると答えた学生は40人(100%)であり、「鼻濁音」の使用ができなくても子どものうたを歌う際には全員が試みようとしていることが明らかになった。歌唱の際に鼻濁音以外の発音で気を付けていることについて尋ねた調査からは、記述をした学生は17人(42.5%)であった。発音法や発声法など、授業で学んだことを実践しようと努力していることが明らかになった。記述した学生の内訳は、Dが1人(100%)、Eが23人中11人(47.8%)、Eが16人中5人(31.3%)であり、「鼻濁音」の認識が高いほど歌唱における注意の意識も高いことがわかった。また記述をしなかった23人(57.5%)は、「鼻濁音」に注意して歌唱しているといえよう。

回答結果からも読み取れるように、言葉に対する意識が高まり、子どもたちにうたを届けるという意識が芽生えたように感じる。実際に言葉をはっきり言うためには、横隔膜で呼吸を整えてお腹で支えて声を出さなければならない。そして言葉をはっきり発音するためには口の中のみならず、顔の表情筋を豊かに使う必要がある。口を大きく開ける時は縦に開ける、お腹から声を出す、強弱に気を付けて声を出す等、「鼻濁音」以外に授業で指導したことを学生たちは心に刻みながら歌っていることがこの記述による回答からわかった。

アンケート3は「音楽3」の授業終了時のアンケートであるが、学生たちはそれまでに、保育実習1Aや幼稚園教育実習で実際に子どもたちの保育に携わる経験を積んだ。このことにより「音楽2」や「音楽3」で取り上げた子どものうたについて、その対象者を具体的に意識することができるようになったのではないかと推察できる。その意識を更に踏み込んで考えられるようにするには、「音楽2」や「音楽3」の授業で継続して指導した「鼻濁音」について使用した場合とそうでない場合の歌唱演奏の違いから客観的に捉えられるのではないかと考え、設問Iは「鼻濁音」の使用例を実際に聴くことし、設問IIは学生自身でその両者の歌い方の歌唱を行い、感想を述べさせた。

アンケート結果からは、「鼻濁音」の発音のできる、できないにかかわらず、全員が大切ということを実感していることが明らかになった。学生メ、モはその違いが判らなかつたと回答したが、実際に自分たちが歌唱した際は、「鼻濁音」の発音を丁寧に試みると回答していた。「鼻濁音」について全員が使用した方がよいと理解し、その発音も自分の歌唱の際に努力しているということがわかった。「鼻濁音」を発音するには作爲的に歌唱しなければならない部分もあるが、学生自身で「鼻濁音」の大切さと必要性を多くの学生が理解するとは意外であった。「鼻濁音」の使用により歌詞の意味や詩情を伝えられるということを理解したといえ授業に効果があったといえる。これにより「美しい日本語」の伝承ができたといってもよい。

5 結語

日本歌曲を体系づけて発表したのはかの四家文子女史¹⁰⁾であるが、その著書『日本歌曲のうたい方』の中で日本歌曲の唱法の要点とは、「1. 柔軟な発声、2. 明確な日本語、3. 心のこもったうたい方」と説いておられる。そしてこの三点は、それぞれが個別のものではなく、鎖の輪のように連結されていて、一点に進歩があれば他の二点にも良い影響があり、それとは逆に、ある一点がひどく間違っていると他の二点も引きずられて悪い方向に向かってしまう。」(『日本歌曲のうたい方』四家文子著、1980年第4刷発行 音楽の友社pp.5)と述べておられる。

日本語は美しい言語である。緑豊かな四季に恵まれた日本ならではの風土より発せられる言葉には、それ自体に抒情性が含まれている。それは母音が多いからであり、これが声を響かせられる理由でもある。しかし保育者となる学生たちはその美しさに気付いているであろうか。学生の普段の会話や歌唱からは、そのことに気付いているとは思えない。歌唱をする際の声の出し方を気にしている学生はいても、自分が発する言葉の発音に対しては意識が低いように感じていた。

四家氏も著書で述べておられることは、筆者もその経験から同感する。歌唱のための第一歩は言葉を明確に正しく発音することが声の正しい出し方に結び付くと理解している。また言葉を丁寧に発音して歌唱することで言葉に感情が籠ることも理解している。つまり美しい日本語で歌うことで美しい声で歌唱することに結び付くといえる。アンケート3の回答からも明らかになったように、学生たちは「鼻濁音」を使用することで歌唱の意識が発声法から言葉の発音法に向かった。その結果、感情を込めて歌うことができると何人も回答していた。また、息が長く続けて歌えるようになったと答えた学生もいた。この実験を行わなければこれに気付かなかったと考える。

「鼻濁音」にすべき言葉の設問では格助詞の「が」に対する使用の解答が98.6%と高い意識であった。この格助詞とはこの他に「は」「を」「へ」などがあるが、文章を構成する上で意味を表す大切な役割があり、この文の主体を述語に連動させる役目がある。一語ではあるがその支配する意味は非常に大きい。歌唱を聴く場合、会話と異なり文書の切れ目が必ずしも文の終わりではない。また言葉のアクセントは普通高低アクセントで付けられているにもかかわらず、歌唱には音の高さが指定されている。また音価により言葉の長さも指定される。故に歌唱の際は、聴き手が聴いた言葉の印象でその言葉本来の意味をも理解できるように、歌い手は歌詞の意味を正しく歌唱する技術が必要といえる。学生たちは、この「が」を「鼻濁音」にしないで歌唱を聴いた時には、淡々と聴こえる、「が」が汚い、使った時の方が自然に聴けたと答えている。また、学生自身が「鼻濁音」を使用しないで歌った時は、言葉の感情が込められない、文が流れた感じになる、「が」の発音を強く歌ってしまうと言っている。そのことに多くの学生が気付いたということが明らかになったのは、この「鼻濁音」にスポットを当てて研究をしたことに意味があったといえる。また鼻濁音の習熟度は6割であり、4割の学生が鼻濁音を使用することが出来ないと言っている。「鼻濁音」の技術を取得するには、そのためのメソッドの研究行っていかなければならない課題も明るみとなった。

「鼻濁音」に対して学生たちは殆ど知識がなかったが、「音楽2」、「音楽3」を通して、「鼻濁音」に対する意識が深まっていった。言葉を大切にすることで、言葉に瑞々しい息吹が吹き込まれ、言葉は言霊となって聴く者の心の中に入って行くからである。保育者の歌ううたは、子どもた

ちの豊かな感性を育むきっかけになると筆者は信じる。そのためには今後もこの研究を続けていかなければならない。

【引用文献】

- ・金田一春彦監修2014.『新明解日本語アクセント辞典 第2版CD付き』(第1刷発行 三省堂)のガ行鼻音(ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ)についての解説pp.23
- ・四家文子著1980.『日本歌曲のうたい方』(第4刷発行 音楽の友社) pp.15の7-14行目

【脚注】

- ・¹⁾ 愛知県名古屋市立上野小学校。
- ・²⁾ 鼻濁音の発音の表記法。
- ・³⁾ 国立国語研究所『日本語地図第1集』(-G-の音1. カガミ. 2. カゲ). (1966初版1981縮刷版)。関東地方の千葉県安房地方や栃木県、新潟県、中部地方の愛知県、近畿地方の三重県志摩地方や兵庫県、四国地方の愛媛県、中国地方全域、九州地方全域、沖縄地方。
- ・⁴⁾ 名古屋女子大学紀要第61号 (人文・社会編)『日本語唱法の研究-鼻濁音I-』 pp.300、図1 アンケート1。
- ・⁵⁾ 名古屋女子大学紀要第61号 (人文・社会編)『日本語唱法の研究-鼻濁音I-』 pp.300、301文中参照。その解答は問1無、問2有、問3有、問4無、問5無、問6有、問7有、問8無、問9無、問10有。
- ・⁶⁾ 名古屋女子大学紀要第61号 (人文・社会編)『日本語唱法の研究-鼻濁音I-』 pp.304、図2アンケート2。
- ・⁷⁾ ガ行鼻音(ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ)についての使用法の解説。
- ・⁸⁾ 「おはながわらった」1962年作曲、初演NHK「うたのえほん」。
- ・⁹⁾ フランス語であり、擬声語、擬態語、擬音語を指す。
- ・¹⁰⁾ 声楽家、日本歌曲の研究の功労者(1906~1981)。正しい日本語と美しい歌の活動として「波の会」を発足した。

【参考文献】

- 金田一春彦監修『新明解日本語アクセント辞典 第2版CD付き』第1刷発行 三省堂。(2014)
- 国立国語研究所『日本語地図第1集』(-G-の音1 カガミ. 2. カゲ). (1966初版1981縮刷版)
- 金田一春彦『日本語の特質』第34刷 NHK出版。(2009)
- 金田一春彦『日本語 新版(上・下)』第47刷 岩波新書。(2012)
- 四家文子著『日本歌曲のうたい方』第4刷 音楽之友社。(1981)
- 河合玲子『日本語唱法の研究-鼻濁音I-』名古屋女子大学第61号紀要人文・社会編pp.297-310
- 大賀寛『美しい日本語を歌う』新第1版(通算第8刷)カワイ出版。(2014)
- 湯山昭著書『人生は輪舞』初版 全音出版社。(2005)
- 沖森卓也『はじめて読む日本語の歴史』第4刷 ベレ出版。(2014)
- 齋藤純男『日本語音声学入門 改訂版』改訂版第10刷 pp.87-89 三省堂。(2014)
- 佐久間淳一、加藤重広、町田健著『言語学入門』第14刷 研究社。(2013)
- 佐藤亮一監修『お国ことばを知る 方言の地図帳 新版 方言の読本』第2刷 pp.319、pp.336-337、pp.350-351小学館。(2002)
- 中山録朗、飯田晴巳、陳力衛、木村義之、木村一『みんなの日本語辞典 言葉の疑問・不思議に答える』pp.146-149、pp.184-188 明治書院。(2009)
- 小林美実監修 井戸和秀『こどものうた100』第49刷 pp.35 チャイルド本社(2013)